

洗いたくない 第一卷

なぜ洗いたくないのか（一）

江添佳代子

つまり食洗機を求めていたのではなかった。私が欲しかったのは、洗いものない人生だった。

洗いたくない 第一巻 なぜ洗いたくないのか(一)

目次	4
はじめに	6
タイミングが悪すぎる	10
かりそめの達成感	29
無意味かもしれない	43
すべてが中途半端	60
あとがき	80

はじめに

「洗いものは、すぐに分かりやすい結果が出るから好き」という人がいる。素晴らしいことだ。それだけ前向きな思考回路を得られた人生に感謝すればいい。その美しい人格を作り上げてきた今日までの全ての出会いに感謝すればいい。おそらくは多くの人から愛されるであろう老後に向かって、そのまま突き進んでいけばいい。

憎悪の炎に焼かれて焦げ付いたままの醜い私を、その涼やかな目で眺めるがいい。

私は洗いものが嫌いだ。

自分が使った調理器具や食器を洗うのが嫌いだ。心の底から大嫌いだ。

いま私が訴えたい内容はそれだけで、他には何もない。

しかし、もしもあなたが「ああ、分かりますよ、たしかに洗いものって面倒くさいですよね。私も好きになれません」とか「それならば食洗機を買ったらどうですか？」などといった反応を示すのであれば——たいがいの人は、それを言うのだけれど——私は目をむいて訴えたいと思う。そういうレベルじゃないのだと。

私は洗いものを心の底から嫌っている。憎悪している。洗いものから逃れられない自分の人生に、そろそろ嫌気がさしている。もしも私が自らの命を絶つことがあるとするなら、それはきつと日曜の夜、大量の食器と調理器具が積み重ねられたシンクの前だろう。

私は洗いものが嫌いだ。この気持ちは誰にも負ける気がしない。「誰にも」というのはさすがに言い過ぎだったとしても、もし「洗いもの嫌い王者」の世界選手権が開催されるなら、ちよつと弱気に見積もつてもアジア予選でトップ3には入るだろう。それぐらいの自信がある。

私がどれほどまでに深く、純粹に、一点の曇りもなく洗いものを憎んでいるのか。なぜ、こんなにも憎んでいるのか。それを誰かに語らずにはいられない。いくら語ったとしても誰かの共感

を得られるかは分からないし、そもそも共感されたいのかどうか分からないけれど、それでも言わずにいられない。そしていま、この瞬間の私にとって、それよりも強く語りたくないことがないのだ。

こんなものをわざわざ書き記して、割付をして発表してしまう人間が、アジアに四人もいるとは思えない。だから世界選挙権が開催されるときは、必ず私に知らせしてほしい。

タイミングが悪すぎる

たとえばゴーストバスターズのウォルター・ペックのように最悪のタイミングで現れ、主人公たちを窮地に陥れるようなキャラクターは、多くの傑作に欠かせない存在だと思う。しかし現実には迷惑だ。日常生活の中で出会いたくない。そして私たちはいつでも、それに似た存在と共に生きている。

私はごはんを食べるのが大好きだ。それはほとんど誰だって同じだろう。

食事は「人体が活動するためのエネルギーを摂取する」という本来の役割をはるかに超えて、私たちの生活のオアシスとして重要な役目を果たしていると思う。

身も蓋もない言い方をするならば。私たちの人生における時間の大部分は、できることなら避けて通りたいもの（たとえば嘔み合わないメールのやりとり、不出来なフォームへの情報入力、通りそうもない見積書の作成と提出、バスタブや風呂釜の掃除、各種証明書の更新、愛想笑いや人間関係の修復など）に費やされている。そんな憂鬱な人生でも一日に三回の食事が挟まっているおかげで、私たちはどうにか狂わずにいられるのではないだろうか。

私たちは知らず知らずのうちに「あと二〇分でランチタイムだ」「これが終われば晚ごはんだ」と自分を慰めながら、だましましたましまし生き延びるように暮らしている。これはもう、ごはんだけが楽しみで生きていると言っているいいかもしれない。そしてごはんには、その役割を担うのに充分すぎるほどの喜びがある。辛いことを我慢するだけの価値がある。

そしてあなたはいま、むさぼるようにして食事を終えたばかり。

すっかり満ち足りたあなたは、こみあげる多幸感で窒息してしまいそうだよと自慢するように「ふう」と息をつく。さつき食べたばかりの料理の残り香（鶏の唐揚げや豚の生姜焼きやカレーライスや親子丼などのアロマ）が漂う食卓で、あなたは脱力した笑顔を浮かべ、食い散らかした

あとの茶碗や大皿や小皿をぼんやり眺めている。

この充足感に匹敵するものは何もないだろう。その権利をようやく掴み取ったあなたは、全力で食事を味わい、すべて胃におさめ、すっかり重くなった腹をさすりながら「あー。食べたなー」などと呟いている。日常生活の中で、これほど甘美な瞬間はない。ないと断言しよう。

その幸せに突然、幕を下ろそうとするのが洗いものなのだ。

洗いものは、食後を終えたばかりの人間を天国から地獄へ突き落とす。「はい、サービスタイム終了ですー」とヘラヘラ笑いながらやってくる。お前はいつまで夢を見ているのだ、さっさと現実に戻れと言わんばかりの、人を小ばかにした表情で。つまり「洗いものという概念」は常に、幸せの絶頂で弛緩している人間だけを狙って容赦なく襲いかかってくる。

「ほら、もう食べ終わったんだから、ダラダラしないでさっさと洗いましょうね」

「……待ってくれ。いま最高に気持ちいいんだ。食べ終わったばかりだぞ。いまじゃなきや駄目なのか？ お前は悪魔か？」

「人聞きの悪いことを言わないでください。あなたのためを思って言ってるんです。知ってるで

しよう。汚れはこびりつかないうちに洗わないと後悔することになります。あなたは洗いのものが嫌いですよね？ その作業を少しでも楽にしたいければ、いまずぐに洗うしかありません。あとで泣くのは自分です。さあさあ立ち上がって」

やつの言うことは全て正しい。

食事が終わった直後に皿を洗うのと、あとまわしにしてから洗うのでは作業の面倒くささが全く違う。三〇分後、三時間後、翌朝と先延ばしにすればするほど、面倒くささと憂鬱さのレベルは膨れ上がってしまう。借金は利子がつくまえに返済するほうがいい。それは紛れもない事実だ。議論の余地もない。

しかし、それを分かっているにもかかわらず、いまの幸せを手放したくない。もう少しだけ余韻を楽しみたい。現実と向き合いたくない。まだ引き戻されたくない。それは人間として当然の欲求ではないのか。いや、もしかしたら私が子供じみているだけなのかもしれない。

こんなことを願ってしまう自分は、いつまでたっても自分の尻が拭けない怠惰な人間なのか？ 遊んだあとの怪獣消しゴムを片付けると叱られていた幼少期から何も成長していないのか？ 私は死ぬまでこんな調子なのか？ 気がつけば私は、わざわざいちばん甘美な瞬間に、そんな自己嫌悪で頭をいっぱいにしている。さつきまで最高の気分だったのに、いまは自分のだらしなさ

にすっかり嫌気がさしている。どうにかしたい。それでも洗うために立ち上がることができない。膝に力が入らない。ここまでろくでもない人間は、生まれてこないほうが良かったのではないか。そんなことまで考えている。

つまり洗う洗わない以前の問題として。「食後に洗いものが存在しているという事実」そのものが、もう私を不幸に陥れているのだ。食後の人間だけが味わえる至福の空間を、やつらは土足で踏み荒らす。現実に取り戻されるタイミングとして最悪だ。こんな暴挙が許されていいのか。

*

このタイミングの悪さについて、あまりピンとこないとおっしゃる方がいるなら。

ちよつと唐突に感じられるかもしれないけれど、どうか「自分が登山しているシーン」を想像してみていただきたい。

登山には様々な目的がある。

主な理由が写真撮影だという人もいれば、野鳥観察やキノコ狩りを目当てにしている人もいる

だろう。あるいは身体を鍛えるためのエクササイズとして登山を選んでいる人もいるのかもしれない。しかし多くの人は、何よりも「山頂に到着したときの爽快感」を楽しみにして山に登るのではないかと思う。

あなたは夏休みを利用して、中級クラスの名山に一人で挑んでいる。

ザックが食い込む肩の痛みや、突き刺さるような直射日光に耐えながら、それでも一歩ずつ、息を切らして丹念に進んでいるところを想像してほしい。

やがてようやく山頂にたどり着いたあなたは、棒のようになった足を止めて帽子を脱ぐ。そのとたん、登頂を祝福するかのような強い夏風が、あなたに吹きつける。帽子の中で蒸されていた髪は煽られ、汗ばんだ頭皮に山頂の冷気が触れていく。そして眼下には素晴らしい眺めが広がっている。広大な雲海からひっそりと頭を出している山々の姿。まるで別天地だ。これこそが絶海だ。

その感動をおさえるように、あなたは息を整えながら、少し腰をそらして大きく伸びをする。そしてゆつくりと肩からザックを下し、大きな岩に腰掛ける。飛び立てそうなくらい軽くなった身体を伸ばしながら、やや放心したように絶景を堪能したあなたは、ここで山頂の喜びを確認するための儀式を始めるのだ。

まずはザックの中から水筒を出す。ここまで大事に残してきた水をコッヘルに入れ、バーナーで湯を沸かす。そしてステンレスのカップにコーヒーを淹れて、それをしみじみと飲んで、やはり山に来てよかった。全てが報われた。そういう瞬間だ。

その静寂なひとときを蹴破るように、あなたのスマホがけたたましく着信音を鳴らし始める。そう、いまや日本の多くの山では、山小屋に携帯電話の電波が届いているのだ。こんなところで電話が鳴ることなんて少しも想定していなかったあなたは、発信者の名前も確認せず、まるで目覚ましのアラームを止めるように、ただ条件反射で受信のボタンを押してしまう。聞こえてくるのは香気な明るい声。

「ども、お世話になってますー。××出版の鈴木ですー」

「え？ えあ……ああ、お世話になってます」

「すみませーん。今日はオフだったと思うんですけど、お出かけ中でした？」

「お出かけっていうか、あの、いま、思いつきり蓼科の山頂で」

「ああ旅行中でしたか。ごめーんなさーい、ちょおーつと一点だけ確認させていただきたいことがありましてねえ」

「あー……はい」

「こないだ、租税条約の書類を送っていただいたじゃないですか。なんかうちの経理が、そこに書いてあった口座に原稿料を振り込もうとしたけど、振り込めなかったって言うてるんですね。どうも番号の桁数もひとつ多かったみたいで」

「あ……ええと、ごめんなさい。参ったな。いまパソコン触れないんですよ。申し訳ないです。戻ったら書類を作り直して再送しますので」

「ああ、書類はいつでも結構なんですよ。ただ、うちも明日から夏季休暇に入っちゃうもんで、そのあとつてことになるかと締め日を跨いじゃうでしょ、そうすると会計上の処理が厄介なことになっちゃうんです。だから、いま口座番号だけ口頭で教えてください」

「え、いまですか？」

「ええ」

「ちよつといま、あの、山の中っていうか、山頂に」

「お手元にキャッシュカードないですか？」

「え、ああそうか、財布はあるし……口座番号ってキャッシュカードに載ってますもんね。支店名を覚えてないけど」

「ああ、カードに三桁の支店コードも書いてありますから、それ教えてもらえればこつちで調べ

ますから大丈夫ですよ」

「ありがたいです……ええと……財布……財布……あった。えーと、いまから読み上げてもいいでしょうか」

「はい、どうぞー」

「えーと、××銀行の普通口座で」

「はい」

「支店コードが 098」

「はい」

「口座番号が、765-4321 です」

「じゃ、繰り返しまーす。××銀行の普通口座で」

「はい」

「支店コードが 098 で、口座番号が 765 の、4321 ですな」

「あってます」

「はい、これで結構でーす」

「お手数おかけしました」

「いーえー。これで翌月末に入金あると思うんで、そっちのほう確認してくださいねー」

「はい。いつもありがとうございます」

「あとですねー、今回の件とは関係ない話なんですけど、ちょっとお伝えしておいたほうがいいことがあって」

「はあ」

「うちの田中、来月から産休に入っちゃうんですわ。だから田中を通さないと厄介そうな案件があつたら今月のうちに」

「え？ え、田中さん結婚してたんですか」

「そう。そうです」

「独身なのかと思ってた」

「いや僕も、前からパートナーがいるとは聞いてたんですよ。なんかね、ずっと一緒に住んでる人がいたけど、籍は入れてなくて。でも先月、彼女さんの出産が近いからって、急に覚悟したって籍入れて。なんかね、けっこう複雑な家みたいで。田中さん、相手の苗字にするんですって。それでもう来月から産休とるって」

「へー。田中さん、産休とるタイプの男性だったんだ」

「そうですねー。このあと他の人も産休とりやすくなるから、僕なんかはいいと思うし、みんなも応援してるんですけどねえ、上のほうでいろいろ言ってるのもいるんですよ。それに田中さん

のプライベートなんて、ほとんどみんな知らなかったもんだから、いっぺんにいろいろ聞かされて驚いちゃって」

「それはまあ、そうでしょうねえ」

「結婚祝いと出産祝いが同時でしょ、名前も変わるっていうし、しかも産休の引継ぎもあって、うちの部署いま無茶苦茶ですわ。まあ田中ひとりに頼りすぎてた部分が大きいってのが、一番の問題ですよねー」

「へええええ……。おめでとうございます、ってメール送っちゃっていいのかな」

「ああ、もう完全にオープンにしてるから大丈夫ですよ」

「そうですか。いやー……。へええーって感じですねえ」

「ですよねえ。ああ、お休み中のところ長々と失礼しましたー。残りの日程、ゆっくり楽しんでくださいねー」

「はい、ありがとうございます」

電話を切ったあなたは自分の手元を見ている。

右手にスマホ、左手にはキャッシュカードがある。そして財布を探すために漁ったザックが、だらしなく足元に転がっている。

どうやらまだ、あなたは山頂にいるようだ。間違いない。目の前に広がる眺望にも、何ら変化は起きていない。

しかしさつきまで見ていた別天地の景色とは、もう何もかもが違う。あなたの九日間の夏休みのピークになるはずだった「山頂コーヒー」の時間は完全に取り上げられてしまった。一步一步踏みしめながら進んだ尾根の記憶、頂上に辿り着いたときの達成感と爽快感、そういったものが全て消し飛ばされている。台無しにされている。いま、あなたの頭の中には「どうして租税条約の書類をミスったのだろう」という疑問、クライアントに対する申し訳なさ、それでも予定通りに原稿料が振り込まれることへの安堵感、そして、ちよつといいなと思っていた田中さんがパパになるという衝撃のニュースが渦巻いているからだ。

その電話の内容は決して非常識なものではなかった。早急に対応してくれた鈴木さんは何も悪くない。効率よく仕事をしただけだ。理にかなっている。しかし、それは決して山頂ですべき会話ではなかった。つまり鈴木さんの電話はタイミングが悪すぎた。最悪だった。まるで食後の洗いもののように。

*

登山の経験はないから、どうも想像できなかったなあという方は、やや下世話ではあるけれど好きな人との初セックスに置き換えてみていただけないだろうか。なにを言い出すのだと思われるかもしれないけれど。

あなたには何年も前から気になっていた人がいた。しかし共通の趣味を持った友人だったので、かえって距離を詰めることができなかった。それでもいくつかのイベントがあり、様々な誤解や口論を乗り越えて、その人と付き合えることになった。そして何度目かのデートのあと、初めて自分の部屋へ連れ込み、ようやく一夜を共にした。その翌朝の状況を想像してほしい。

早朝六時の自宅。

とつぜん玄関でドアノブがガチャガチャと音を立てる。あなたがあわてる暇もなく、いきなりドアが開く。遠方に住んでいるはずの母親が、ノックもせず合い鍵でドアを開けて、ためらいもなく入ってくる。

驚くあなたを気にする様子もなく、彼女は寝室まで上がり込み、「あらやだ、こちらにいるのは

彼氏さん？ はーじめましてー。美咲の母です、うふふ」などと気持ちの悪い笑顔を浮かべながら、当然のように居座っている。そんな状況で、あなたは何を思うだろうか。

「え……なに自己紹介してんの」

「なにって？」

「いや、なんでそこに立ってんの」

「だって、お母さん美咲に彼氏がいるなんて知らなかったんだもん。ちよつとびっくりしちゃったけど、せつかくだから、ちゃんとご挨拶しておかないとねえ」

「状況を見てよ。いま挨拶しなくてもいいでしょうが。あとで説明するから、いや、ちよつと、とりあえずいまは出てって」

「なに言ってるのよ。いい機会じゃないの。お母さんだって、東京には滅多に出てこられないんだし」

「だったら来る前に連絡を」

「あなたも今年で二十九なのよ？ その年でお付き合いしてるんなら、そのうち帯広にも連れてくるつもりだったんでしょ？」

「あのさあ、そういう極めてセンチティブな話題を、よくもまあ、まだ名前も知らない娘の彼氏

の前で」

「考えてもみなさいよ。ここから帯広なんて日帰りで行ける距離じゃないのよ、彼氏さんだって大変でしょう。仕事だつて簡単に休めないだろうし。夏休みは飛行機の料金も高くなるし、それならいまのうちに」

「そういう気配りはいいから、他に気配りすることいくらでもあるから、いったん出て。駅前のドトールでお茶してて。こっちから電話するから」

「ああもう、寝つ転がったままぎゃんぎゃん言わないの。もう朝なんだからさつさと起きなさい。とにかく早起きが一番なんだからね。健康的な睡眠の取り方には諸説あるんだーとか言う人もいるけど、結局のところ人間の身体には朝型の生活が」

「そのデイスカッション、いま必要？」

「ほら、さつさとシーツと枕カバー外しちゃいなさい。お母さん洗ってあげるから」

「あとでやるし」

「ダメよ。なるべく早く洗濯しないと。そういう汚れはね、すぐに洗わないと染みになるの」

「そういう汚れて……」

「今日は天気も良くなるんですって。もうすぐ梅雨だし、次はいつ晴れるか分からないでしょ、お布団を干すには絶好のチャンス」

「いや、あのさあ、なんで布団ひっぱってんの？ 見て分からない？ どっちも裸よ？ うちらオールヌードよ？ それ見たとき、気の利いたコメントする準備はできてるわけ？」

「あら、そうなのね。まあそうなるわよね。じゃあお母さん、先に廊下をお掃除するわ。こっち見ないようにするから、掃除機かけてる間に二人とも服を着ちやいなさい」

「なんでわざわざ、いま掃除すんの」

♪ ふふふ〜ん」

「あのさあ、ここ木造アパートなんだから、こんな時間から掃除機かけないでよ、普通に近所迷惑だつてば」

♪ お掃除だいすき お母さん〜 おねぼう大好き 美咲ちゃん〜」

「いやもう、マジでやめて」

♪ そんな美咲の彼氏さん〜 ちょっとなで肩 シヤイボーイ〜」

「やめろつってんだろ！」

「んまあー。普段は母親にそんな口をきく子じゃないのに。彼氏の前だと威勢がよくなっちゃうのねえ。調子に乗っちゃって。ねえ彼氏さん、普段の美咲はこんな子じゃないのよ？ だけど、ちよつと内弁慶つていうのかしらねえ。そういうところはあるのかもしれないのよねえ。中学生ぐらいのときなんて大変で」

「うーわー」

止める気力すら失ったあなたは、鼻歌を歌いながら掃除機をかける母親の背中を呆然と眺めている。さつきから隣で無言を貫いている最愛の人が、果たして起きているのか、目を開けているのか、それを確認する勇氣はない。

ずっと好きだった人と初めて一緒に迎えるはずだった朝食の時間が、ちよつと高いほうのコーヒーの香りで満たされるはずだった朝の空気が、ガアガアと音をたてる掃除機に吸い取られていく。こういうことだ。食後すぐに皿を洗うというのは、こういうことなのだ。

母親の言い分は、おそらく何も間違つてはいない。それが普段の休日なら、ありがたいアドバースとして聞き入れることができたのかもしれない。しかし、いまは来てほしくない相手だった。いまだけは絶対そこにおいてほしくない人間だった。まるで食後の洗いもののように。

つまり洗いものは「夏休みを利用して日本百名山に登るたび、山頂でコーヒーを飲んでおきかき必ずかかってくる仕事の電話」、あるいは「ずっと好きだった人とようやくセックスをした翌日の早朝に限って、必ず訪れては説教をしながら掃除を始めようとする母親」と同じようなものなのだ。しかも一日に二回も三回も、それは常に最悪のタイミングでやってくる。

まったく空気を読もうとせず、あなたの気持ちなど少しも考慮することもなく、あなたにいますぐ現実へ戻ることを促し、一刻も早く機能的な選択をするように迫り、あなたの幸せな時間を台無しにする鬼だ。悪魔だ。それを憎まずに、私は何を憎めばよいのか？

かりそめの達成感

私は今日も、賽の河原で石を積むように洗いものをしている。

最悪なのは、積んだ石を倒しに来る鬼が、私自身の顔をしていることだ。

洗いものには達成感がない。私がそう言うと、こんな返事をされることがある。

「えー、全然そんなことないでしょ？ シンクいっぱいに積み重なった洗いものを、ぜんぶ洗い終えたときは気持ちいいじゃん？」

オーケー分かった。ここはいったん君の意見を受け入れることにしよう。

たしかに君の言うとおり、巨大なモンスターを殺したとき、つまり洗いものの山を全て片付けられたときの私は、それなりの充足感みたいなのを得ているのかもしれない。あなたがその感情を「達成感」「爽快感」のように表現したいのであれば、私はそれを否定しない。

しかし、血反吐を吐くような思いで洗いものを済ませたときの私は——おそらく、それなりの達成感を得ながら——ここで一息つくことを願ってしまうだろう。なにしろ私は、戦いを終えたばかりなのだ。敵を倒した戦士には休息が必要だと。必ずそう思ってしまう。これが畏なのだ。

よし、自分を労うために、ちゃんとしたコーヒーを飲もう。美味しい豆を挽いてドリッ普しよう。そう決意したあなたは湯を沸かしながら、コーヒードリッパーにフィルターをセットする。あっ、そういえば昨日、ご近所さんからカステラをいただいたのだ。この瞬間に、ちよつと甘いものがあるのは最高じゃないか。あなたは嬉々として冷蔵庫からカステラを取り出し、分厚めに二片だけ切り出して皿に乗せる。

淹れたてのコーヒーとカステラをテーブルへ運び、ゆったりとソファに腰を下ろしたあなたは、軽く湯気を飛ばしながらコーヒーをすする。まるでブレンディのCMの原田知世と同じ容姿にでも生まれたかのような錯覚を覚えながら、柔らかい笑みを浮かべ「ふう」と声を漏らす。それは

決して派手ではないけれど、地道で充実した大人の人生の一コマにも見える瞬間だ。決して悪いものではない。

あなたは、誰もいない部屋でにっこりと自分自身に笑いかけながら、もう一口コーヒーをすする。そのとき唐突に気づいてしまうのだ。

……ちよつと待て。このコーヒーカーップは誰が洗うのだ？

いや、カップだけではない。テーブルの上にはカステラの乗った皿とフォークが置かれている。あなたは大きく目を見開き、はっとした表情でシンクへと視線を移す。

そこには、もう次の敵がいる。つまりドリッパーとコーヒーマーサーと包丁が、早くしろよと誘うようにあなたを待ち構えている。ついさっきの私が得た達成感みたいなものは、いったい何だったのだ？

つまり、洗うものはゴジラとの戦いではない。

あなたが対戦するのは、秘密兵器で一掃できるタイプの敵ではない。激戦を繰り広げ、やっとの思いでそれを倒したとしても、しばらく地上に平和が訪れたりはしない。それは矢継ぎ早に、絶え間なく襲いかかってくる。争いに疲れた戦士を癒すはずだったコーヒーマーサーとカステラは、あつという間に次の敵となり「ほら、早く綺麗にしるよ」とあなたにいやらしい笑いを向けてくる。

この戦いは、あなたが死ぬまで終わることがないのだ。

「いやいや、それは洗いのものに限りませんよ。家事は全部そういうものです。人間が生きているかぎり逃れることはできません。やってもやっても決して終わりが無い。死ぬまでずっと続く。それが家事ですよ。当たり前じゃないですか」と。そう思う方もいるだろう。

しかし洗いのものは、洗濯や料理や掃除とは全く異なったステージで「矢継ぎ早」を感じさせる、待ったなしの非情な作業なのだ。

この待ったなし感について説明しよう。

たとえば週末の午後、部屋に掃除機を掛けたとしよう。その直後、なんとなく髪をかき上げたあなたが、「しまった、さつき掃除したばかりの綺麗な床に、もう髪の毛が落ちたかもしれない！」と絶望することはないだろう。床に髪が落ちたとしても、とりあえずは無視できるからだ（実際、目に入らないことも多い）。はつきり気になる形で落ちている場合は、指でつまみ上げてもいい。あるいは次に掃除機をかけるまでの間クイックルワイパーで凌ぐといった簡素な対処法もある。だから「さつき掃除したばかりなのに！」と泣かなくていい。

洗濯だって同じだ。「なんということだ、さつきようやく洗濯を終わらせたばかりなのに、もう

タオルで手を拭いてしまった！」と嘆くことはないだろう。タオルは手を拭くたび、すぐに洗うものではないからだ。少なくとも数日はそのまま使うことができるので「いま、やったばかりなのに！」という悲壮感がない。

強いて言うならば。「ああ、さつき泡クリナーとブラシで徹底的にトイレ掃除をしたばかりなのに、いまウンコをしてしまった」といった悲しみは、ちょっとだけあるかもしれない。しかし、それはそれとして割り切れるだろう。多くの人は「もうウンコをしたのだから、いまずぐトイレ掃除をやりなおさなければならぬ」とは思わないはずだ（はつきりと目立つほどの汚れが付着しない限りは）。

しかし洗いのものとそうはいかない。どれほど大量の洗いのものを済ませたばかりでも、新たに汚れた皿や調理器具が発生すれば、それは「処理を待っている次のタスク」として存在を主張する。たとえ、いまずぐには対処しないと決めた場合でも——つまり「さつき洗ったばかりだから、いま洗わなくてもいいだろう。今回のお茶の分は、夕飯のあとにまとめて洗おう」と決意したとしても——そのコーヒークップとドリッパーとサーバーと皿とフオークと包丁は、シンクに重ねられたままになる。床に落ちているのかもしれない髪の毛や、タオルに付着した少量の水分とは

違って、その洗いのものは嫌でも目に入ってくる。まるで壁に貼られたTODORISTのように、はつきり目視できる形で、未処理の案件としてシンクに居座りつづける。

それはあなたがキッチン近くを通るたびに、「お前は逃げているだけだぞ」「この怠け者め」「早く片付けろよ」「後回しにしたツケは大きくなるぞ」と語り掛けてくる。そして実際、「夕飯のあとにまとめて洗おう」と決意すると、その夕飯を作るときの作業の邪魔にもなる。これほど容赦のない家事が、皿洗いの他にあるだろうか？

もしもあなたが私と同じように洗いのものを憎んでいて、なおかつ「自分にゴ褒美をあげるなら、お茶と甘いものを楽しむのが一番だ」と考えるタイプの人物だとしたら。洗いのものを終えたときあなたに、真の癒しが訪れることは決してないのだ。その褒美は新しい苦難を生み出すだけ。こんな作業の、いったいどこに達成感があるというのか？

さつき「洗いのものはゴジラとの戦いではない」と記したばかりだが。ゴジラでないとするなら、どんな敵に似ているだろう。

それはRPGのマップの中、徒歩でしか行けない目的地に向かってパーティが移動しているとき、会いたいわけでもないのに会ってしまうタイプの敵に似ているかもしれない。もちろんボス

キャラではない。ダンジョンの中にいる敵ですらない。ただ単に目的地へ向かおうとするだけで付きまといてくる鬱陶しいやつだ。

しかし、それらは雑魚キャラとは思えないほど強く、倒すのが妙にやっかいで、それでいて何の面白みもない単純な攻撃だけを繰り返す。さらに「にげる」コマンドは用意されていない。私はそれと出会うたびに「見逃してくれ」「ただ普通に歩かせてくれ」と苦しまなければならぬ。いやむをえず戦って勝利しても、得られる経験値はゼロに近く、アイテムやゴールドをドロップすることも決していないのだから本当に報われない。

その敵を倒すたび、精神がポロポロになったあなたは休息を願ってしまう。近くの町の宿屋に泊まって旅を再開したいと思う。しかし、いま宿屋に寄り道をすれば目的地はさらに遠くなり、また同じような出会いを最初から繰り返すことになるだろう。仕方ない。コマンドメニューで残りの薬草の数を確認したあなたは、ふたたび目的地へと向かう決意を固める。その数秒後には、また新たな敵に行く手を阻まれてしまう。

うんざりだ。こんなことが続けば、最後までゲームを進めたいという意欲も殺がれるのではないか。あきらかにゲームバランスが狂っている。こんなゲームを設計したクリエイターは、どうかして。

「シンクに積み重ねられた調理器具と食器を洗い終えたときの達成感」なんて偽物だ。気のせいだ。そんなものは、面白くもなんともない雑魚キヤラを倒したときの、ほんの一時の気休めにすぎない。そんなものを喜んではいけない。

*

「まあ確かに『一瞬の気休め』に過ぎないのかもしれませんが、それでもシンクいっぱい皿を洗い終えた瞬間は気持ちいいのだから、そのときの幸せを噛みしめましょうよ。あなたみたいに文句ばかり言うのは損ですよ」と笑う人がいるなら、私は言おう。お前は家畜か、お前は少女パレアナか、寝ぼけたことを言うな、目を覚ませと。

それは花見のシーズンに「今日は比較的、スギ花粉が少なくって過ごしやすいですよね」などと呑気に微笑む花粉症患者と同じだ。なぜ苦痛に慣れようとするのだ。我々が、呼吸さえままだらないことを当然のように考え、症状の苦しさに言及することを控え、大人しくポジティブな常識人を装い、自費で薬を買って我慢しているかぎり、国は何もしない。生物学者たちの見識を少しも反映しなかった、あの恐ろしく愚かな戦後の杉植林政策について、彼らは何も反省していない。

その責任を誰も取っていない。さらに公害として認めもせず、無益に大量植林したスギの樹を手入れもせずに放置している。なんと恥知らずな連中だ。それを少しも糾弾せず、疑問を持たず、まるで春の風物詩だとも言うように、鼻水と涙を滝のように垂れ流しながら、目をぐしゃぐしゃにして「ニンニク注射って試したことあります？」などと云ってる国民のほうにも問題があるのだ。我慢を美德にするな。辛いときは辛いと訴え、納得いかないときは怒れ。そうやって戦うのが人間ではないのか？

「今日の気温は32℃ですか。ここ数日は36℃の猛暑が続いたから、いくぶん涼しく感じますね」とか言ってる東京都民も同じだ。もはや沖縄よりも夏を過ごしにくくなった東京のど真ん中で、いまも樹木を伐採し続けようとする人間に腹を立てないでどうする。「ヒートアイランド現象」という言葉が浸透し始めてから、もう五十年以上が経っているというのに、ここまで何ら対策をしなかったばかりか、この期に及んでもまだ樹を減らしたがつている人間を非難しないのは何故だ。グレタ氏の生意気さを嘲笑しながら、片手に日傘、片手に携帯型の扇風機を持ち歩き、「今年おすめのネッククーラー」などといった記事を読んでいる場合なのか。むち打ち症の患者じゃあるまいし、そんなワケのわからないものを当たり前のように装着して日用品扱いしている場合なのか。なんなんだ、孫悟空でもあるまいし、その緊箍児みたいな物体は。もしかして、東京都政や

三井不動産の悪口を言うのと締まるのか。小池百合子にはめられたのか。いったい何をやっているのだ。我々の夏は、ここまで暑くならなくてよかったはずだろう。なぜ怒らないのだ。なぜ大人しく従うのだ。

ほんの一瞬のガス抜きみたいな気休めに騙されるな。洗いもので苦しめられる日常に慣れるな。「仕方ない」だの「考えるだけ無駄だ」だの「ちよつとした喜びを大切に」だのとといった言葉は麻薬だ。それさえ言つてりや現実的な人間になれる、大人になれる気がするだけの安い慣用句だ。なぜ、こんな苦痛に耐えなければならぬのだ？ どうにか避けて通る方法はないのか？ そんな心の叫びを無視して、ささやかな喜びをありがたがるのは、もうやめようじゃないか。

「はいはい、もう分かったからシンクいっぱいのお皿を洗ってごらんさい。ほら、気持ちがいいでしょう。無駄な努力や抵抗はやめて、自分にできることだけをすればいいですよ」なんて発想は、そんなものは堅実でも賢明でもない、ただの思考停止だ。批判的思考の欠如だ。

いつも喜び、たえず祈り、全てのものに感謝するのが人間の正しい姿だとも言うのか。違ふだろう。私たちはもつと幸せを求めて生きられるはずではないのか。この状況は何かがおかしいのではないか。それを考えることを完全にやめてしまったら、私たちは家畜と同じだ。

いや、分かっている。ある程度、不条理な我慢を強いられることで安心するタイプの人だっている。与えられたものだけに感謝するほうが好きな人もいる。誰かに「待て」「よし」と命令されてから食べるような人生を好む人もいる。その価値観を否定したいわけではなかった。ちよつと言い過ぎたかもしれない。その点については謝ろう。家畜呼ばわりしたのは流石に悪かった。

しかし私は違う。人間でいるために、私は訴え続ける。なぜだ。なぜ、こんなにも辛いのだ。なぜこんなにも虚しいのだ。何かが間違っている。「洗いなもの」が存在している私たちの生活様式は、明らかに設計が狂っている。どこかで何かを間違えて、ここまで来てしまったのだ。何か抜本的な対策を打たなければならぬ。我々は幼児ではないのだから、もっと真剣に考えるべきだと。私はそれを叫ばずにいられないのだ。

休憩 洗いたくないポエム

僕の話はクドいだろう。そろそろ読むのに飽きてきたかい？ 無理しなくていいさ。
飽きたときは止めればいい。また読みたくなったら読めばいいのだし、そのまま二度と
読まなくても構わない。これは洗いものじゃないからね。

そう。洗いものは、どんなに飽きたって止めることが許されていないんだ。

無意味かもしれぬ

何か打ち込んでいる人をニヤニヤと眺めながら、「そんなことをしても無駄だよ、意味がない」と教えたがる人間は醜悪だ。そういう人間にだけはなりたくない。

しかし皿を洗っているときの私は、自分自身に対して同じことをしている。

おそらくは誰にでも「知らないほうが幸せだった雑学」というものがあるだろう。

たとえば、生き物や昆虫を好きな人なら誰でも知っているであろうメジャーな寄生虫のハリガネムシ。水中で繁殖するために、宿主となったカマキリやコオロギを操って入水自殺させるとい

う特殊な生態の生物だ。真つ黒な身体をくねらせ、宿主の身体からニユルニユル出てくるときの姿が衝撃的なことでも知られている。

この生物の生態について、残酷すぎると眉を顰める人もいるだろう。

しかし私は、「生き物の不思議」として耐えることができる。いつのまにか寄生されたうえに、脳をコントロールされて殺されてしまう宿主が非常に気の毒ではあるけれど。生存と繁殖を目的とした寄生虫の生態というのは、まったく不思議で面白いなあと感じることができる。

それでも「成長したカマキリの七割から八割は、このハリガネムシに寄生されている」という悲しい豆知識については、できれば死ぬまで知りたくなかった。

それを知ってからというもの、私はカマキリを見るたび苦痛を覚えるようになってしまった。こんなに美しくて格好いい虫なのに、こんなに可愛らしい目をした生き物なのに、たぶん腹の中にはアレがいるのだ。いま目の前で鎌の掃除をしている彼は（彼女かもしれないけれど）、おそらく寿命まで生きることができない。その時が来たら唐突にマインドコントロールされて、泳げるわけでもないのにふらふらと川へ飛び込んでしまう。彼が身を投げたとたん、その肛門からは、一気にアレがニユルニユルと出てくるのだ。そういう未来が確定しているのに、まだ彼自身は何も気づいていないのだろう。なんて残酷な話だ。

こんな悲しい思いをするのはたくさんだ。もうカマキリなんて見たくない。できることなら私は、カマキリがハリガネムシに寄生されている確率を知らないまままでいたかった。

昆虫は苦手だからどうだっていい、むしろ嫌いだから死んでくれたほうがいいと思われる人もいるだろう。それならちようどいい、そんなあなたには、ぜひとも顔ダニのことを考えてみてほしい。

「ほとんどの人間の顔には、顔ダニが生息しており、その数は平均で二百万匹」という知識は、あなたにとって楽しい雑学だろうか。決してそうではないはずだ。「人体にとつては無害なダニで、基本的には余分な皮脂などを分解してくれるありがたい虫なのですよ」などと解説をされたところで、なんの気休めにもならないだろう。

私個人は微生物に対する不快感や恐怖をそれほど持っていないほうなので、「へえ、顔ダニというのは誰の顔にもいるものなのですね、それにしても二百万匹つてのはすごいですね、なるほど」で終わらせることができる。

しかし、この顔ダニが「夜になると毛穴から出てきて、人間の顔面で交尾をし、ふたたび毛穴に戻っていく」という話は聞きたくなかった。

これは猛烈に不愉快だ。私が恋に破れて泣きながら眠った夜も、大切なものを失った悔しさに

うなされた夜も、こいつらは人の顔の上でさんざん乱交パーティーを開いた挙句、それに飽きると「いやあ、今夜もハッスルしちゃいましたねえ。じゃあそろそろメシでも食いますか」と毛穴へ戻っていたのだ。自分の顔面に大量の顔ダニが生存していることは許せても、彼らの傍若無人で破廉恥な生活パターンについては何も知りたくなかった。

勘のいい人であれば、もう私が何を言おうとしているのかお気づきかもしれない。

そう、私は洗いなものに欠かせないスポンジのことを話そうとしている。

「食器洗いのスポンジの中では、雑菌が大量に繁殖している」

これだ。

私にとつて、この豆知識ほど、知らないほうがよかつたと思うものはない。

ただでさえ皿なんて洗いたくないのに、本当に一枚たりとも洗いたくないのに、それでも心を殺して作業を終えたばかりの人間に向かつて、「ああ、やつと終わりましたか。よかつたですなー。でも、そのお皿って、本当はちつとも綺麗になつてないんですよねー」などと言うのは、最悪の嫌がらせではないか。妥協に妥協を重ねて成し遂げたことを「あ、それ意味ないっすよ。やるだけ無駄なんですわ」とせせら笑うような話ではないか。どこまで人を苦しめたら気が済むのだ。

こんな非道が許されていいのか。

私は嘘をつかれるのが嫌いだ。何かを隠されることが嫌いだ。意図的に歪められた美しい話に騙されるのが大嫌いだ。たとえそれが自分に不都合であっても、忘れかけていた悲しみを蘇らせる内容であったとしても、できるだけ事実を伝えてほしい、真実を知りたいと望んでいるタイプの人間だ。それでも台所用スポンジと雑菌の件については願わずにいられない——たとえそれが、動かしようのない真実なのだとしても、どうして黙ってはいはくれなかったのだ？ なぜ隠しておいてくれなかったのだ？ と。

この「食器洗い用のスポンジの中では大量に雑菌が繁殖している」という禍々しい豆知識は、なんらかの解決法と一緒に伝えられることが多い。しかし、しばらくすると「そのような対策は無駄だった」という悲報と共に、新たな解決法が伝えられることになる。

たとえば最初に「除菌」を大きく謳った台所用洗剤が売り出される。これさえ使っていれば、ただ普通に洗っているだけでもスポンジが除菌されるというのだ。すると「そんなものを使っても繁殖は抑えられません、もっと徹底的に殺さなければ」というメッセージとともに、熱湯消毒を薦める学者が現れる。

そうかと思うと「熱湯をかけただけでは雑菌は死にません。レンジで加熱すれば、ほとんどの菌は死滅します」と言われる。それなら簡単だと喜んだのも束の間、今度は「レンジでスポンジを殺菌すると、ほとんどの菌が死滅する反面、極めて熱に強い菌が生き残り、他の菌の分まで増殖することができるようになる。ここで増える菌は根絶が困難なので、いつそ殺菌しないほうがマシである」などといった、あまりにも救いのない研究結果が発表されたりもする。

挙げ句の果てには「結局のところ、スポンジは週一回以上の頻度で買い換えるべきだ」などといった非現実的な与太話まで語られる始末だ。みんながみんな、自社商品の売り上げを増やすために、サイトのアクセス数を増やすために、知名度を上げるために、それぞれの目的で好き勝手なことを言っている。それを誰も止めようとしらない。無法地帯だ。まったくキリがない。

私は潔癖症ではないので、スポンジで繁殖する雑菌についてはなるべく気にしないように努力しつつ、ある程度まで使ったものはバスタブの掃除などに使うという方向で対処するようにしている。その程度の柔軟さはある。

だって、そもそも雑菌ってなんだ。その言葉の意味は、使われる条件によって変わる。まずはスポンジについて語られるときの「雑菌」の定義から明白にするべきじゃないのか。やつらが「雑菌だらけ」と言うとき、それは常に人体へ悪影響を及ぼす菌について話しているのか。あるいは

ほとんどの菌が有害だと言いたいのか。それすらも分からないじゃないか。

たとえばセレウス菌だとかサルモネラ菌だとか、具体的なものをいくつか挙げられたうえで「これらの繁殖を避けるためには、このように努力しましょうね」と言われるのならまだ分かるけれど。「台所用のスポンジには雑菌がいっぱいです」なんて、そんな大雑把きわまりない表現で脅迫されるのはどうなんだ。

だって我々は普段から、雑菌まみれの世界で生きているじゃないか。いや、それ以前の問題として、我々の身体の中だって雑菌だらけだ。そうだ。我々の身体を構成している細胞の数よりも、体内に住んでいる雑菌のほうが数は多いという話を聞いたこともある。つまり我々自身の何割かが雑菌で構成されているようなものじゃないか。すでにアホほど体内に取り込んでいるものを、我々の一部ともなっているものを、そこまで怖がるのはおかしくないか。

しかし、いくら私が吠えたところで、洗いものという行動が「自分の使用した調理器具や食器を清潔にすることを目的とした業務」である以上、やはり雑菌を除去するのが重要であることに変わりはない。だから、それらの菌の繁殖地になっているキッチンスポンジを利用している間、「この作業自体が大変に無駄なのではないか」という不安は振り切ることができない。はてしなく虚しい。そう思うのも当然の流れだ。

私にとって、この虚しさを決定的にしたのは食品衛生の授業だった。

私はカナダの専門学校に通っていたとき、Food Safe（食品安全管理）の資格を取った。これは通常、飲食店の厨房などで働く人のための資格なので、現在の私の仕事には必ずしも要求されるスキルではない。しかし私の職種でも状況によつては児童に食事を与える機会があるため、履歴書に書けばそれなりに評価される。それならば取っていたほうが有利だろう、という理由で、それは私が選択したカリキュラムの一部に組み込まれていた。

ここで教えられた「カナダにおける食器の安全管理」の指導というのは、日本の飲食店で何度か働いたことのある私にとって、たいへん衝撃的な内容だった。一言で言えば、基準がとんでもなく厳しかったのだ。

まず大前提として、レストランやホテルや医療施設などでは、業務用に設計されているディッシュウォッシュヤー（熱湯と熱風による高温の滅菌処理が長時間に渡って行われる）を使うべきであるとされていた。もしもそれが使えない場合は、他の何らかの高熱を使った消毒（最低限の温度と時間の条件をクリアする必要がある）、あるいは規定の薬品を使った消毒を行わなければならない。つまり不特定多数の人間に飲食物を提供するプロが、スポンジと台所用洗剤で手洗いを

するというのは「危険な行為」であり、「食品安全管理の基準に準拠していない」と位置づけられていた。

つまり、私が不承不承ながらに受け入れている、あの辛く悲しい作業は、カナダの衛生基準の最低限に達してすらいらないというのだ。もう、この時点で私はすでにノックアウトさせられているのだけれど、この授業には追い打ちがあった。その「手洗いの危険性」とやらを学ぶために、我々学生は一本の恐ろしい教材映像を視聴しなければならなかったのだ。

映像の主な内容は、菌が増殖するときのパターンや冷蔵庫内で食材を管理するときの注意点についてレクチャーするものだった。しかし映像の冒頭、タイトル文字が表示される前の導入部分はドラマ風に作られていた。その内容がとんでもなかった。

いっぺん見ただけの映像なので、あまり正確ではないだろうけれど、だいたい大筋ではこんな感じだ。

……舞台は北米らしき一般家庭の住居。

なかなか清潔感のある、明るくて広くて綺麗なキッチンが映し出される。一人の女性が上機嫌

で鼻歌まじりに皿を洗っている。そこに、威勢のいい少年の声が響く。

「ママ、ちよつと待って！ そのスポンジは雑菌だらけだよ！」

突然、声をかけられた女性が振り返る。そこには学校帰りと思わしき少年が、にっこりと微笑を浮かべて立っている。

その賢そうな少年は、台所という環境がどれほど雑菌を繁殖させやすいものなのか、とりわけ台所用のスポンジという物体が、雑菌にとつてどれほど格好の繁殖スポットとなるのかを朗々と説明していく。そして画面には拡大されたスポンジが映る。「見えない雑菌」がCGで表現される。おびただしい量の菌がうごめき、どんどん増殖している。

「あら？ だけどママは、ちゃんと洗剤を使っているのよ？」

そう言って、母親はスポンジに洗剤を垂らし、ぎゅっぎゅっ握りしめる。彼女の手のひらの中で広がったスポンジには、もうあまり雑菌が残っていない……かと思いきや、その一秒後には以前よりも大量の雑菌がゾワゾワと大繁殖している。

「ママ、無駄なんだってば。そんなことをしても菌は減らせないよ！」

「だけど、お皿は洗わないと汚いし……」

「洗ったあとのお皿は綺麗に見えるけど、実際には、洗う前のお皿よりも雑菌だらけで不潔なんだよ」

衝撃的なセリフのあと、洗いカゴに並べられたばかりの真っ白な皿にカメラの焦点があたる。その皿に付着した雑菌が、ふたたびC G処理で可視化される。どす黒いネバネバとした細菌が、皿を覆い尽くすように、ざわざわと広がっては蠢いている。たしかにそれは、洗う前の皿よりも汚く見える。

母親は、ぎよつとした表情を浮かべて叫ぶ。

「それじゃあママは、さつきから、お皿に雑菌を塗り広げていたの？ 洗わないほうがマシだったのかしら？」

「そういうことさ。だから、僕と一緒に正しい衛生の知識を身につけていこうね」

子供はカメラ目線で、得意気な表情を浮かべる。

この映像には、かなりの誇張があったはずだ。いまでも私はそう信じている。

洗ったあとの皿のほうが、洗う前の皿よりも不潔だった？ そんなわけないだろう。いいや、もしも「洗ったあとのほうが雑菌は増える」という話が真実だったとしても、だからといって洗わないほうがマシだったということにはならない。なるはずがない。「そのまま洗わずに放置した皿」にはどれだけの雑菌が増殖するのだ。その点をわざと無視して「洗わないほうがマシ」などといった極論を展開するのは、あまりにも乱暴ではないか。

そもそも「汚らしい雑菌」の表現が意図的すぎる。ただ巨大化するだけならまだしも、そこに禍々しい色をつけて、不気味に揺らしたのは完全に演出じゃないか。ただ可視化するだけなら、どんどん増えていく半透明の可愛らしい物体（たとえばドラクエのスライムとか、あるいはソフランSのCMに出てきたパチパチ君のような造形）にしても良かったはずなのに。これは雑菌に対する恐怖を煽り、悪意を植え付けることを目的としたプロパガンダだ。こんな作戦に惑わされてはいけない。いまでも私はそう確信している。あんな、悪意しか感じられないようなイメージ映像を本気で受け止めるほうが馬鹿げている。そう思う。

しかし実際のところ、この授業で見た映像は、「私が洗いものに対して抱く虚しさ」を何倍にも増幅させてしまった。

食事のあと。どうしても洗いたくない、キッチンに向かいたくないと泣き叫びたい気持ちを抱えて立ち上がり、ようやく皿洗いを始めようとスポンジを手取るたび、あの少年がいつも私の脳裏に蘇る。彼は茶化すものを見つけた喜びをこらえきれないような笑顔を浮かべながら「そんなことをしても菌は減らせないよ」と言うのだ。

またお前か。私は自分の脳内から彼を消そうと試みる。どうにかして気を紛らわせようとする。しかし少年の笑顔は私の頭にこびりついたままだ。どうやっても拭き取ることができない。まる

で皿に付いた雑菌のように。

「だからさあ、洗ったあとのお皿はあ、綺麗に見えるけどお、実は、洗う前のお皿よりも、雑菌だらけで不潔なんだ！ すつつつごく不潔なんだよ！」

彼はそう言つてケタケタと高らかに笑う。いや、映像に出てきたときの彼は、そんな風に笑つてはいなかった。しかし何度も何度も繰り返し脳内で再現しているうち、その少年の表情はどんどん邪悪になり、より意地の悪い声で喋るようになってしまったのだ。

「……それじゃあ私は……さつきから……お皿に雑菌を塗り広げていたの？」

挑発に乗つてはいけなさと分かつていても、皿の上でスポンジを滑らせるたび、ママのセリフを頭の中で繰り返し返さずにはられない。それでも私は皿を洗う。わざわざ雑菌を塗り広げたあとの皿をすすぐ。どう考えたつて、ぬるま湯で雑菌は流れないように思えてくる。なんだかすべてが無駄なのかもしれない。

「だからあ、なんで分かんないのかなあ。いまそうやって、皿を洗つてる君はあ、どうしようもない馬鹿なんだよ！ せっかく僕が正しい除菌の方法を教えてあげたつていうのに！ なにを聞いてたんだらうねえ？ 君は、わざわざ皿を汚して喜んでる大馬鹿者なのさ！」

少年は心の底から嬉しそうに言う。

「黙れ！」

誰もいないキッチンで、私は口に出して叫んでしまう。

自分の声に驚いた私は、呆然と立ち尽くしている。

洗いカゴに乗った皿の上では、もののけ姫のタタリ神のような姿をした雑菌が。一斉に赤黒い触手を伸ばして、まるで私を嘲笑うように揺れている。

休憩
洗いたくない川柳

今月の入選作

おにぎりを 皿にのせるな 罰当たり
重ねたら 乾かないのは 分かった
外食が いちばんいいのは 食べたあと
僕たちは きつと進化を 間違えた
雑菌だ 僕の前世は 確実に
袋めん 鍋から食べても 美味しいね
いまここで 誰か言ってよ 「ぜんぶ割れ」
テーブルに フォーク一本 残ってた
「洗おうか？」 それはおおむね プロポーズ

すべてが中途半端

日々の儉約を楽しむ私を見て「マンなのではないか」と言った友人がいる。もしもそうだったなら、私はここまで洗いものを憎まなくて済んだのにね。

洗いものの嫌いなところを本気で挙げはじめると、それは終わりのない旅になる。しかし、それらの理由の多くは「とにかく中途半端だから」と言い換えることができるのかもしれない。

洗いものは中途半端な作業だ。だから疲労感も中途半端になる。

「疲労」という言葉からは、ネガティブなイメージを受け取る人が多いだろう。しかし肉体的な、あるいは精神的な疲労が我々にもたらすのは、常に悪いことばかりではない。適度な疲れは仕事

のあとの食事やビールを美味しくしてくれる。そのあとに深い睡眠と、爽やかな目覚めを提供することもある。

時として、心地のよい疲れは心身の両方を癒してくれる。

「いやー、今日は疲れたよな」と、わざわざ仕事仲間に告げるときの私たちは、不思議と笑顔になっていくことが多い。おそらくは心地の良い疲労感と、それによって得られる重厚な満足感を味わっている最中だからではないかと思う。

しかし洗いものはどうだ。あなたに心地の良い疲れをもたらしてくれる作業だろうか？ そんなことはない。

なぜなら洗いものは、始まりから終わりまでに必要とされる時間、労力、集中力、技術力などありとあらゆる要素が軽めで中途半端だからだ。家庭における洗いの作業は、なんの難しさもなく、なんのメリハリも面白みもなく、頭脳も筋肉もほとんど使うことがないまま、せいぜい数分から三〇分程度のボンヤリした動作だけで終了してしまう。普段よりも洗いのものが少し多めだったからといって、いったい誰が「いやあ、疲れた疲れた。今夜はぐっすり寝られそうだな」などと言うものか。

*

ここで「要するに退屈な作業が嫌いだと言いたいのですね」と誤解されるのは心外だ。

いい機会なので、念のためにこれだけは申し上げたい。私は「クリエイティブではないから」「誰にでもできる簡単な作業だから」「私にはもっと相応しい仕事があるはずだから」洗いのものが嫌いなのではない。それは断じて違う。

私は高校生の頃から現在に至るまで、けっこう多種多様な仕事を経験してきた。だから、それがどんな内容であったとしても、ほとんどの仕事には何らかの独特な楽しみがあり、何らかの独特な困難があり、その困難から解放されたときの独特の充足感があることを知っている。職業に貴賤なしとまで豪語するつもりはないけれど、土木作業でも宛名書きでも塾講師でも翻訳者でもフリーランスのライターでも有限会社の社長でも、たいがいの仕事には「そこでしか得られない楽しみ」があるものだと思っている。

しかし、自宅における洗いのものの作業には、本当に何も無いのだ。

せっかくだから、他の単純作業と比較してみよう。

これまで私が経験した仕事の中で、最も単純だったのは「送り先リストに記されている住所と

氏名を封筒に書き込んでいく手書き作業」と、「某ガソリンスタンドの会員登録申し込み専用ハガキに記された個人情報を入力していくタイピング作業」のどちらかだと思う。

これらは軽作業のように思われるかもしれないけれど、精神的にも肉体的にもかなり過酷だ。椅子に座ったまま一日八時間、肩や手首や指の痛みに耐えながら、来る日も来る日もただ延々と同じ作業をするだけだ。頭を使う場面はほとんどない。面白いことも滅多に起こらない。誰かとコミュニケーションを取ることもないし、声を出すような機会もない。立ち上がるのは休憩時間とトイレだけ。気分転換にコーヒーを買いに行くことも許されていない。これほど厳しい条件で働いたところで、ろくな経験も知識も得られない。なんの成長もない。ただ肉体と精神と時間を金に換えているだけだ。そのうえ得られる報酬は安い。

しかし、そんな仕事にも喜びはあった。たとえば「今日、何件ぐらいの仕事をこなせるか」を自分ではつきりと確認できるのだ。ほとんどの仕事は、「今日は客の数が多かったから」「今日は天気が良かったから」「今日は店長のダジャレが普段以上に低レベルで心が折れたから」「今日は面倒くさいクレーマーの電話を受けてしまったから」「EXCELの操作には自信があると言っていたはずの新人社員がピボットテーブルの使い方を知らなかったということが今日になって判明したから」などといった不測の事態が日々の業務に影響するので、自分のパフォーマンスを

単純に数値化できない。しかし宛名書きやタイピング作業の場合は、職場に停電やネットワーク障害でも起こらないかぎり、外的な要素がほぼ全く影響しない。ここまで明確に「自分の有能さ／無能さ」が可視化される条件は滅多にないだろう。

一昨日は何件の仕事をこなしたのか。昨日は何件だったか。今日は何件の処理ができたのか。その数字が右肩上がりになっている様子を見られるのは、まるでゲームのスコアを上げているような楽しさがある。自分がどれだけ仕事を効率化できるのか、試されているような気分にもなる。さらに「自分の取り入れた改善策」——たとえばハガキを見ると、できるだけ視線をモニタから外さなくて済むようにするための工夫など——の成果も、一時間ごとの処理件数によって確認することができる。それは言い訳の余地がなく、恐ろしいほどストイックで、曖昧さのない「自分との戦い」なのだ。かなり恰好いとは思わないか？ いや、あなたがどう思うかは、この際どうでもいい。私はそれを「きっかけーなあ」と思うことができる。つまり自分との戦いに勝ったのだ。

こういった単純作業特有の魅力は、他にもいくつかあるけれど、とりわけ派手なものとしては「言葉で表現することのできない何かが見えてくるような、不思議な瞬間に立ち会える」という

ものが挙げられる。要するに単純作業がもたらすトリップ感だ。

何かの調査結果を読んだり、専門家の意見を聞いたりしたわけではないから、これは私の推論に過ぎないのだけれど。子供のころから、それなりに高度で複雑な処理能力を鍛えるようにして育てられてきた現代の人間の脳は、あえて単純な作業だけを何時間も強いられたとき、ちよつとしたトランス状態に陥ることができるのだらうと思う。パン工場のアルバイトや、精密機器の組み立て工場（寮と食事つき）などのライン作業を経験した知人たちと会話したかぎりで言うなら、おそらくそれは誰にでも起こる現象なのではないかと思う。

ずっと同じ場所で、同じような雑音（機械の動作音やタイピング音など）を聞かされながら、同じ単純作業を繰り返しているとき、それは起こりやすい。ある瞬間、ふと別のステージに入っているように意識が肉体から離れ、もう何の苦痛も疲労も感じられなくなり、ふんわりと眠っているような気分になり、ただただ自分の腕だけが、自分の意思とは関係なく自動的に動いているような感覚を経験することができるのだ（私の場合、さらに斜め上方から自分を見降ろしている存在になることができた）。

自分の作業効率を確認して楽しむことができるうえ、まったく金のかからないトリップを経験

できる（より正確に言うなら、金をもらってトリップできる）。さらに仕事から解放されたときの嬉しさもひとしおだ。真の単純作業には、真の単純作業にしかない喜びがある。

しかし洗いのものは違う。あれは偽りの単純作業と言っている。

たしかに洗いのものは、ほとんど頭を使わなくても進められる。しかしぜんぜん頭を使わなくていいわけでもない。その日の洗いの内容によって、それなりに効率のいい進めかたを考えることになる。たとえば洗う順番、予洗いの有無、洗いかごへのアイテムの配置など、洗いやすさや乾きやすさを少しだけ考慮しながら作業を進めなければならない。この「少しだけ」の匙加減が、どこまでも微妙なのだ。事前に明確なプランを立ててから、一挙に実行へ移すような内容ではない。かといって何も考えずにノープランのまま進めていくと、のちのち困ることになるという、なんとも爽快感がなく、やりがいもなく、単純さが中途半端な作業なのだ。

さらに洗いのものでは、自分の作業効率が良いのか悪いのか見当もつかない。

たとえばタイマーで作業時間を計測して、「昨晚は二〇分かかったけど、今日は七分で済んだぞ」なんてことが分かったとしても、「それがどうした」で終わってしまう。なぜなら洗いのものや面倒くささは、その日のメニューによって大きく異なるからだ。

それは食べる量や人数だけで決まるものではない。使った鍋の数だとか、料理の脂っこさだとか、そのメニューに必要とされる小皿の数だとか、料理で使われたスプーンの多さだとか、様々な要素が絡まってくる。そのおかげで、タイピングのように自分のパフォーマンスを客観的に評価することができない。なんとなく今日は手早く片づけられたような気がしても、その中途半端な感覚は「ただの気のせい」かもしれない。

そして洗いのものは、軽作業のくせに中途半端な危険性を伴っている。

たとえば危険手当が支給されるレベルの、本当に危険な業務となれば、そこには独特の楽しみがある。ヘルメットや安全靴、保護ゴーグルといったアイテム身を包んで業務に取り掛かるときに緊張感は、意外と悪くないものだ。むしろ気持ちがいい。ただの日雇いのバイトでも、つなぎを着たり分厚い手袋をつけたりした状態で危険に立ち向かっていると、その道の熟練者になったかのような錯覚を覚える。そして大きな音を立てながら回転する機械だとか、赤々と光る高熱のツールだとかを勇敢に扱っているときの自分は、普段よりも豪胆で格好いい女になっているような気がする。こういった気持ちよさを週末の趣味で得ようとしたら、サブゲーショップで散在しなればならないだろう。しかし危険手当の出る仕事では、けっこう高額な賃金を受け取りながら素敵な自己満足に浸れるのだから本当にありがたい。

しかし洗いものには、そういったワイルドさが少しもない。なんの準備を整えることもなく、パジャマや部屋着のまま(ちなみに私は裸族なので全裸がユニフォームとなることも多い)、何の緊張感も持たずに開始できてしまう。どこまでもユルい態度で業務に直面できる。

しかし、それでいて意外と危険な作業なのだ。一般的な成人が家の中でなんらかの怪我をするとき、その舞台はキッチンであることが多いけれど、なぜか私たちは「調理するときの危険さ」ばかりに注目してしまう。たとえば「包丁で指を切った」と言われたら、ほとんどの人は、料理中に包丁で指を切ったのだなと思ひ込むだろう。しかし実際には包丁を洗ったり拭いたりしているとき、あるいは洗いカゴから包丁以外のものを取り出そうとしたときにも、その事故は起きている。

そして、ただ包丁の扱いさえ気を付ければいいというものでもない。見た目はおとなしいのに、油断すると指や手を切ったり、挟んだりするような調理器具はけっこう多い。うっかりミスで皿やグラスを割ってしまうと、片づけの最中に手や足の裏を切ることもある。それは決して危険な作業とは呼べないけれど、多くの人が従事している仕事——たとえばデスクワークや営業職などと比較すると、「だいぶ危険な作業」だとも言うこともできる。ああ、中途半端だ。

つまり。洗いものは何の準備もせずに始められるけれど、だからといって気を抜いてはいけな

いのだ。それは極めて難易度の低い、ボンヤリと進められる作業（かつ、ボンヤリしてしまいがちな作業）であるものの、本気でボンヤリしすぎていると、思わぬ事故に巻き込まれてしまう。とはいえ、キッチンにはライン生産の工場ではないので、ちょっととした気のゆるみで片腕がゴムベルトに巻き込まれてしまうだとか、五本の指が一気に切断されてしまうだとかいうようなことも起こらない。多くの場合、その事故がもたらすのは、バンドエイド一枚で対処される程度の怪我となる。まったく、なんて中途半端な緊張感なのだろう。

*

そして最も中途半端なのは、必要とされる時間の長さだ。

あまり頭を使わない流れ作業は、ある程度の量をまとめてから淡々と片づけるほうがうまくいく。宛名書きでもタイピングでも、自分の席に座るなり、いきなりトップスピードで働くことはできない。まずは最初の数分〜三〇分ぐらいで仕事のテンポみたいなものを取り戻して、自分を作業に慣らした段階から、肉体や精神に疲労が生じるまでの数時間で、最も高いパフォーマンスが得られやすい。

しかし洗いのものは基本的に待ったなしの業務だから、一時間分の作業をためることができない。だから毎回チマチマとした量をこなすことになってしまふ。それは大概の場合、「ちようど心身が作業に馴染んでくる頃合い」の少し前に終わってしまふ。

ようやく乗ってきたぞと思うぐらいのタイミングで「はい、お疲れさん。もう終わっていいよ」と言われてしまうのだ。これが私には非常に気持ち悪い。ちよつと待っててくださいよ。洗おうと決めてから実際に始めるまで、あれほど私は苦しんだのですよ、ようやく立ち上がって仕事を始めたばかりじゃないですか。もうちよつとやってみりゃ、そのうちだんだん気持ちよくなってくはずなんです。なんでいま、このタイミングで急に梯子を外すような真似をするんですか。もしかしてあなた、わざとやつてるんですか。そう訴えたくもなる。しかし訴える相手がいないのだ。このやるせなさはどこへ持っていけばいいのだろう。

「いやいや、それは気のせいでしょう。嫌いな作業は短いほうがいいに決まってるじゃあないですか。『自分のもつと行けたのに、ここからはもつと効率よくできたはずなのに』なんて考えるのは、苦行から解放された喜びで強気になってるだけです」

そう思った方もいるかもしれない。しかし違うのだ。実際、私がアルバイトをしてきた飲食店の中には、食器や調理器具の洗いのものを伴う職場もあった。そのときの洗いのもの（通常、三〇分

から一時間ほどで終わる作業）は、自宅のそれと比べると、驚くほど苦痛にならなかった。

とはいえ、もちろん私は洗いのことを心の底から純粹に憎んでいるので、飲食店で働いているときも、できるだけ避けて通ろうとしていた。なるべくシンクのほうには近づかず、客からの注文をとったり、料理を運んだり、調理の補佐をしたりするほうの作業に回ろうと画策していた。しかし「ああ、いまそつちは止めていいから、そろそろ洗い物やっというて」などと指示されるたびに、「いやです！ この仕事、もうやめます！ なんなら殺してください！」と叫びたくなくすることはなかった。それは私にとって、とても意外なことだった。

最初のうちは恐ろしかったのだ。いくら金のためとはいえ、こんなにも嫌いな作業を長時間に渡って強いられたら、自分は気が狂ってしまうのではないかと。もしかしたら職場から逃げ出してしまったり、とつぜん全裸になって暴れたり、店長を殴ってしまったりするのではないかと。しかし、そのようなことはぜんぜん起こらなかった。業務として行う大量の洗いのものは、自宅で発生する洗いのものより、ずっと苦痛が少なかったのだ。

「こんなことを三〇分もやらされたら死ぬんじゃないのか」という予想は的外れだった。むしろ、これは一時間を超えちゃうだろうな、と思うぐらいの皿がシンクに積みあがっているのを見ると、開き直ったように覚悟を決めることができた。それを目の前にしてスポンジを手を取ったときも

「よし、やってやろうじゃねえのよ」と思えた。ある程度の量をまとめてこなせば、肉体も精神も作業に馴染んでくる。自分はいまよくやっているような気分になれる。すべてを洗い終えたときの充足感みたいなものも、それなりに得られたと思う。

しかし自宅の洗いものは、それらを手に入れる直前で強制的に終了するという、極めていやらしい性質を持っている。こういうのは本当に、精神衛生上よろしくないと思う。

ちよつと想像してみしてほしい。

たとえば高校時代のあなたが、私と同じように「学校行事が大嫌い、鬱陶しい、何ひとつ関わりたくない」と感じるタイプの生徒だったとしよう。

ある朝、うっかりテレビで「赤い激流」の再放送を最後まで見てしまったあなたは、いまさら学校へ向かったとしても二時限目にすら間に合わなくなったことに気づき、なんだか面倒くさくなってズル休みをしてしまった。そんな日に限って、クラスでは文化祭の実行委員のメンバーが決められていた。普段から少しも協力的な態度を見せてこなかったあなたは、クラスメイトたちの陰謀によって実行委員に選出されてしまった。もちろんあなたは激しく抵抗する。こんな決定は無効だ、私は絶対にやらないぞ。しかしあなたがいくら叫んでも、いちど決定したことは変更されなかった。

一時は退学まで考えたものの、これも運命なのだど割り切ったあなたは、その役割を仕方なく受け入れる。最初はひたすら憂鬱だった。一刻も早く逃げ出したかった。しかし「ハリボテのマスター制作」という地味な案件があることを知り、くだらねえとは思いつつも、これはチームワークを無視して作業できそうだと考える。

あなたは「自分がいかにハリボテ制作に興味があるのかを態度で示すため——つまり。これの監督だけは必死でやるから他には一切かかわらないことを許してほしい、ということをや遠回しに宣言するため——早朝からハリボテの制作現場に向かい、黙々と作業をするようになる。そして実際、その作業も想像していたよりは面白いのかもしれないと感じるようになった。他にやりたがる生徒もいないので、厄介な調整もほとんど発生しない。意外とサクサク進んでいく。これならいける。これなら最後までやり遂げられる。けっこういい具合に仕上がってきてるし、誰からも文句は言われないだろう。そんな確信を強めながら、あなたは大きなハリボテのキャラを作り上げていく。

そして文化祭を一週間後に控えた日の放課後。

ようやく造形が終わり、あとは塗装をすれば完成という段階になって、とつぜん現場に実行委員長が現れるのだ。これまで一度も見に来たことがなかったのに。

「どう、吉田さん、進んでる？」

「ええ」

「おー、やってるねー。すげえいいじゃん」

「ええ、想像してたより完成度高いなって、自分でも」

「ここまでありがたいね、お疲れさん」

「え？」

「吉田さん、ちゃんとやってくれたからさ。委員会の仕事も今日で終わりってことでいいよ」

「あの……もしかして私、辞めろって言われてます？」

「ちようどハリボテも仕上がったことだし」

「まだ完成してませんよ。このあと塗装して、明日か明後日には」

「なんか美術部のやつがね、これ見て面白がっちゃって。ぜんぜん違うデザインで塗りたいとか言ってるの。クトウルフ？ ワルキューレ？ なんかよく分かんないんだけどさ、せっかくだから、あいつらにやらせてみようかなと思って」

「よりにもよって……そんなベタな」

「キヤラそのまんま作るより、なんか変わってるほうがいいじゃん、ってことに決まったの」

「私、何も聞かされてないんですけど」

「だって、さつき決まったから」

「さつき？」

「今日は昼休みにミーティングあるって連絡したよ。吉田さん、ほとんど参加したことないけど」

「……」

「あのさ。吉田さん、最初からものすげえ嫌がってたじゃん。実行委員会に入るの」

「それはまあ、そうですね」

「それでもここまでやってくれたからさ、こっちとしても一応は感謝してるよ風の態度を見せて終わらせたいなど」

「いや、でも、予定どおりきっちり進めてきたのに、いまさら急に」

「だって、こんなもの校庭に置いても意味がないとか、何の獨創性もないとか、既存のキャラのハリボテを作る理由がどこにあるのか分からないとか、こんなものじゃ客は呼べないとか、吉田さん言ってたじゃん。それでも仕方なくやってんだなーと思ってたんだけど」

「それはまあ、言いましたけど」

「なんか意外な反応だな。辞めていいよって言ったら、すげえ喜ばれるだろうなって想像してたのに」

「……いったん始めたからには、納得するまでやりたかったっていうか」

「もしかして、本当はめっちゃくちゃ実行委員やりたかった？ 本当は選ばれて嬉しかったのに、照れちゃってたとか？」

「そんなわけないでしょうが！」

「じゃあ文化祭には興味ないけど、ちいかわは大好きだったとか？」

「ぜんぜん好きじゃないです。ぜんぜん好きじゃないのに、ここまで毎日やってたらそれなりに愛着も湧いてきて、よけい腹が立ったぐらいで」

「あー。吉田さんって、ちいかわとか嫌いそうだよね、見るからに」

「いま、ちいかわはどうだっていいでしょうが。つうか、ちいかわをクトゥルフ風に塗るのって一体どういうことなのよって、もしかしてそれ、うっかりしたら面白いんじゃないのと思っちゃうことにもムカついてきた」

「いまから美術部に入って手伝えば？」

「あああ、そういうことじゃないんですよ、ここまで手塩にかけてきたものが、なんでいまさらそんなことに」

「そっかー、けっこう楽しんでノリノリでやってたわけね」

「楽しんではいませんよ」

「あれだけイヤだイヤだって言ったの、もしかして態度だけだった？ 言葉の裏にある真意を

理解してほしかった系の人？」

「うわ、腹立つ」

「だとしたら謝るよ。なんか気の毒に見えちゃってたからさ。そのうち区切りがついて、辞めるのちようどよさそうなタイミングが来たら、解放してあげたいとか思ってたんだよね」

「そのタイミングって絶対。いまじゃないと思うな」

「でもさつき、多数決で決まったから」

「……」

「吉田さん、やることやったし、もう解放してあげようって。満場一致で決まったよ」

「嫌われてるな」

「なんか、ほんとうごめん」

「誠実に謝られるのもキツイな」

「そっちの気持ち、ぜんぜん分かってあげられなくてごめんね」

「なんで別れ際の彼氏みたいな顔するかな」

「意外と頑張ってくれたよねって、みんなも感謝してたよ。ほんとお疲れさん。残りはこちらでやるから。ああ、あと、文化祭当日の打ち上げだけど」

「行くわけねえだろうが！」

洗い物というのは、そういう感じで終わる。

あれだけ嫌がっていた私にさんざん無理強いをしておきながら、こつちが乗り気になってくると、それを察したかのようなタイミングで「ああ、もう充分ですわ」と言って離れていくのだ。本当にわざとらしい。屈辱的でいやらしい。こんなのはただの嫌がらせだ。

自分の性癖が常識的で真っ当だと主張するつもりはないけれど。残念ながら私は、このような寸止めプレイに情緒を見出せるタイプの変態ではない。

あとがき

もしかしたらあなたは、ここまで読んでいる間ずっと、「どうして食洗器を買わないのだろう」と思っていたかもしれない。だとしたら、あなたは本当に我慢強い人だ。

その疑問を抱えたまま、最後まで読んでくださったことに心から感謝したい。あなたのように素晴らしい忍耐力を持った人は、きっとどれほど長いプレゼンを聞かされているときでも、最後の質疑応答の時間まで我慢することができるのだろう。ちゃんと相手の話を最後まで聞いてから疑問をぶつけられる。それは重要なスキルだ。履歴書に書いたほうがいい。これほど優秀な方に読んでいただけた私は、本当に恵まれた人間だと思う。

しかし残念なことに、今回の「第一巻」では、食洗器の話題まで到達できなかった。私には、食洗器について語るよりも前に説明しておきたいことが山ほどあったのだ。この問題については、たぶん第二巻で語れるのではないかと思っている。あるいは第三巻で。

おいおい何いつてんだ、こんな話ばかり二冊も三冊も読めるわけねえだろ、さすがに限界だ、あんたには付き合いきれない。そのようにおっしゃるだろうか。当然だ。あなたの言うことは何も間違っていない。こんなにクドくて意味のないものを読ませて申し訳なかった。

あなたが私から離れる決意をなさったのであれば、それを尊重したいと思う。まずはここまで付き合ってください。ことに重ねて感謝したい。そしてあなたを自由にしてあげたい。

なぜなら私は、あなたの洗いものになりたくないからだ。

二〇二四年十二月三十一日 江添佳代子

ezkay.com

© Kayoko Ezoé 2025